

紀元前14・13世紀における古代オリエント の王家の女性による外交の役割

齊藤 麻里江

はじめに

紀元前14・13世紀における古代オリエント世界は、エジプトと西アジアにおける外交が盛んな時期であった。その背景として、各々の国の王が対抗関係にありながらも対外関係の均衡を保っていたことが挙げられる。その主要な政策の1つとして政略結婚がある。政略結婚については、例えば紀元前14世紀におけるエジプトとバビロニア、ミタンニ、アルザワで交わされたアマルナ文書の中で言及されており、それらの国の王がエジプトの王家に娘を嫁がせることや、一方でエジプトの王女を要求する記述が見られる。

王家の女性のうち、政略結婚を通じて外交に携わった者もいたし、実際に書簡を他国の王と交わして外交に携わった者もいた。彼女たちが外交に果たした役割に関する研究は数少ないが、エジプト王家の女性と外国の王家の女性の役割の違いという観点から G. ゼカラキ Xekalaki や L. O. G. ダ・シルヴァ da Silva が分析している。これらの研究によると、エジプト王家の女性と西アジア王家の女性の役割には異なる点が多い。例えば、紀元前14世紀ではティイのようにエジプト王家の女性は外国に権威を持ち直接的に外交に関与する一方で、ミタンニのタドゥヘパのように西アジア出身の王家の女性は間接的に政略結婚を通じて外交に参与するような図式が想定できる。しかしながら、紀元前13世紀においてヒツタイトのプドゥヘパが積極的にエジプトと交渉を交わした事例があるように、時代の変容によって各国の王家

の女性の外交の役割は移り変わっている。

以上のことから本稿では、まず書簡を通じて外交を直接的に進める王家の女性の役割を分析する。次に、王家の女性が間接的に果たした外交の役割、つまり政略結婚を通じてどのような影響を与えたかを明らかにする。これらの分析から、各国の勢力によるだけではなく、外交に携わった者の技量や国ごとの外交政策によっても王家の女性の外交への関与の形が決まっていたことがわかる。

第1章 古代オリエントの王家の女性による外交の役割

外交における王家の女性の役割とは何だろうか。ゼカラキは、2007年に新王国時代におけるエジプト王家の女性の外交の役割を研究した¹。彼女によると、特に外交において明らかに活躍していた女性は、「ヘムト・ネスウ・ウェレット」（偉大なる王の妻）という王の第一夫人のための称号を持つと指摘する²。例えば、ティイとネフェルトイティは、この称号が与えられた。更にティイには「ムト・ネスウ」（王の母）という称号も与えられた³。

一方で、ゼカラキは「ヘムト・ネスウ」（王の妻）の称号を与えられた女性が「ヘムト・ネスウ・ウェレット」の称号を与えられた女性と同様の権利を持たなかったと考えられると指摘し、他国から嫁いだ王家の女性の場合、父や自国の使者と連絡を取れないだけでなく、他国と商業的なやりとりもできなかった可能性があると述べる⁴。このような異なった称号を持った王家の女性の比較から、ゼカラキはエジプト王家の女性と他国出身の王家の女性の権利には差異があったと想定している⁵。

ダ・シルヴァは2016年に後期青銅器時代における王家の女性の役割を研究した⁶。アマルナ時代におけるエジプトの女王の役割について、ティイとネフェルトイティを第18王朝後期において特に卓越した王女として取り上げている⁷。その論拠として、次の資料を挙げている。まず、図像学的資料においてティイがスフィンクスの姿で外国人を踏みつける図像がある⁸。この図像から、ティイが外国の人々に対して強い権力を保持していたことが考えられる。文献資料では、アメンヘテプ3世の結婚記念スカラベにティイ

の名が記載されている。また、ティイはミタンニのトゥシュラッタから送られたアマルナ文書 EA26 の書簡の受け手であった⁹。トゥシュラッタからアメンヘテプ 4 世へ送られた EA28 では、ティイの外交における知識の豊富さが記載されている。考古資料においては、ティイの木造の頭部（ベルリン博物館所蔵：ÄM 21834, ÄM 17852）がメディネット・エル＝グローブから発見されている。この頭部にはもともとメネス頭巾を簡略化したカト頭巾が被せられていたが、何者かが後に長い羽飾りが付いた太陽円盤の頭飾りをのせている。デザインを変えた意味を正確に把握することは難しいが、王家におけるティイの役割が年を経るごとに大きくなっていったことを反映している可能性がある。

ネフェルトイティについては、図像学的資料として女性の捕虜を殴る図像が発見されている¹⁰。そして、ネフェルトイティに仕えた高官メリラ 2 世の墓には、アメンヘテプ 4 世の統治 12 年を祝うネフェルトイティとアクエンアテンのレリーフが描かれている¹¹。この図像では、彼らは異国の人を前に座っている。そして、考古資料ではウルブルンの沈没船の中でネフェルトイティの名が刻まれた金のスカラベが発見されている¹²。これらの資料から、ダ・シルヴァはティイとネフェルトイティがエジプト内外に影響力があり、外交においても影響力があったと捉えている¹³。

更に、ダ・シルヴァは外国の王家の女性の役割が、ミタンニとバビロニアのように他国の王のもとへ嫁いだことだと指摘する。例として、ミタンニのシュッタルナの娘ギルヘパがアメンヘテプ 3 世と結婚、トゥシュラッタの娘タドゥヘパがアメンヘテプ 3 世、アメンヘテプ 4 世と結婚したことを挙げている。また、バビロニアのクリガルズ 2 世の娘がアメンヘテプ 3 世と結婚、ブルナブリアシュ 2 世の娘がアメンヘテプ 4 世と結婚したことを例に挙げている¹⁴。他にもエジプトとの婚姻を進めるために、ヒッタイトのハットゥシリ 3 世の妻ブドゥヘパがラメセス 2 世と文通したことを取り上げています。ダ・シルヴァは、ブドゥヘパは外交において影響力があった点において、ティイに類似することを指摘している¹⁵。以上のことから、彼女はエジプト以外の外国の王家の女性は政略結婚を通じて他国と同盟を結び外交関係を保っていたと指摘している¹⁶。

ゼカラキとダ・シルヴァの研究から、ティイやネフェルトイティを代表するエジプト王家の女性はエジプト内外に影響力を持ち、外交にも直接関与したと捉えられる一方で、外国の王家の女性は政略結婚を通じて外交に参加したように思われる。しかしながら、そのように2つのパターンにすみ分けて良いのだろうか。次章では、当時の政略結婚に関する研究史を整理していく。

第2章 政略結婚に関する研究

政略結婚に関して、A. R. シュルマン Schulman は、1979年に新王国時代におけるエジプトの政略結婚について研究した。彼は、エジプトが繁栄していた時には王女を嫁がせないと述べている。なぜなら、エジプトの王の娘が他国へ送られることはエジプトの威信を無くし、他国の王の権力をエジプト王の権力にまで上げることになるからである¹⁷。

M. リベラーニ Liverani と S. A. マイヤー Meier は、2000年にアマルナ文書にみられる政略結婚について研究した。リベラーニは、西アジア側は王女を嫁がせていることに対し、エジプト側は実行していないことから相互の誤解や口論が起きたとしている¹⁸。マイヤーは、西アジアでは属国に王女を嫁がせていた習慣から、ヒッタイトやバビロニアがエジプトへ王女を嫁がせたと考えている¹⁹。

藤井信之氏は2012年にエジプトの新王国時代と第三中間期における婚姻政策について研究した²⁰。その中でシュルマンの議論の問題点を指摘している。第一に、シュルマンが挙げる外国へ嫁いだ王女の例は、ソロモンへ嫁いだファラオの娘のみであることと、ヒクソス王へ嫁いだ王女の例は、ヒクソス王家の女性と考えられるため例にならないことを示唆している²¹。そして、第二の点として、藤井氏は国勢の優劣によって新王国時代の婚姻同盟が実行されたか否かという問題を提起している。なぜなら、新王国時代にはエジプト国内でもエジプト王女は王家以外の家系に嫁がなかったことや、EA4でアメンヘテプ3世が「古来よりエジプト王の娘は誰にも与えられたことがない」(EA4:6-7)と発言したように、諸外国との婚姻同盟を当時のエジプト王家の婚姻政策にもとづいて遂行しようとしていたと考えられるた

めである²²。一方、ヒッタイト王は属国に盛んにヒッタイト王女を嫁がせたように、エジプトとは全く異なる婚姻政策をとっている。オリエント世界での婚姻同盟は、シュルマンの説に対して、藤井氏は国勢の優劣以上にそれぞれの国独自の婚姻政策に影響されたと推定している²³。つまり、新王国時代のエジプト王家の婚姻政策とは、王女を他の家系に嫁がせないが、自らは時にはティイの例のように他の家系から王妃を迎え入れていたということである。藤井氏は、諸外国との婚姻同盟でも当時のエジプトの婚姻政策に基づいて政略結婚を実行しようとしたのではないかと指摘している²⁴。

山本孟氏は2013年と2015年に紀元前2千年紀後半のヒッタイトの外交について研究し、その中でヒッタイト王が王女を属王と結婚させることが当時の慣例であったと述べている²⁵。同氏によると、その方法は、従属を受け入れた国の王と条約を結び、属王にその国の支配権を認める。次に、ヒッタイト王女と結婚させて、ヒッタイトが属国を支配する正当性を持つことに繋げる。そして、ヒッタイト王は世代が変わってもこの構造が維持されるようにしたという。嫁いだヒッタイトの王女は属王の正妻でなければならず、属王の王位継承者は属王と王女との息子でなければならなかったという²⁶。ヒッタイトの婚姻政策が明確化されていたことがわかる²⁷。

以上のように、政略結婚に関する研究は研究史上において意見が分かれている。シュルマンが指摘するように国勢の優劣からエジプトは王家の女性を他国へ嫁がせなかったのか、それとも藤井氏や山本氏が述べるようにヒッタイトのような国家独自の婚姻政策が影響していたからなのかが議論になっている。シュルマンの視点は、西アジアに対するエジプトの権力の差異からエジプトと西アジアの王家の女性の役割の違いとして表れていると捉えるゼカラキやダ・シルヴァの見解と類似している。しかしながら、藤井氏や山本氏が指摘するように、各国独自の政策が政略結婚に反映されていないかを見直す必要はある。

第3章 王家の女性の外交の役割

第1節 紀元前14世紀において書簡を通じて外交を進める女性

1、エジプト

(1) ティイ

書簡を通じて外交を進める王家の女性として、紀元前14世紀ではティイが挙げられる。彼女はアメンヘテプ3世の正妃であり、アメンヘテプ4世の王母であった。ティイは、王族出身ではないが王家に匹敵するほど古いアクミム出身の家系であり、アメンヘテプ3世の結婚記念スカラベにおいてティイの子供が正統な王位継承者であることが認められている。内田杉彦氏は、王族以外の女性であるティイが選ばれた理由は不明だが、政略結婚の可能性があると指摘する²⁸。ティイは、「偉大なる王の妻」、「上下エジプトの女主人」、「二国の女主人」、「二国の貴婦人」、「王の母」の称号を保持していた。ゼカラキヤルイーザが指摘しているように、エジプトの敵を踏みじめる様子で初めて女性のスフィンクスの姿で描かれたり²⁹、アメンヘテプ3世の巨像と同じ大きさの像が造られていたりする（カイロ博物館所蔵）など、資料から権力を持った女性であったことが考えられる。

ミタンニのトゥシュラッタからティイへ直接送られた EA26 は、アマルナ文書の中で唯一エジプトの王家の女性へ送られた書簡である。冒頭の挨拶における決まり文句がティイに対する内容である。以下のようにトゥシュラッタがアメンヘテプ4世へ送った EA28 の挨拶の下線部の箇所と同様な言い回しを用いている³⁰。このような表現をした言い回しは、バビロニアやアッシリアなど他の列強国の王からエジプト王へ送られる手紙にも文章の冒頭に記載されており、トゥシュラッタがティイを交渉の相手として対等に近い存在として捉えていたことが考えられる。

EA26: 1-6; edition by Moran 2000, 84.

「エジ [プト] の女王である [ティイ] へ [言いなさい]。このように、[ミタンニ] の王、ト [ウシュ] ラッタ、[私のために] 全てが上手くいく。あなたのために全てが上 [手く] いくように。[あなたの家族、] あなたの息子の [ため]、全てが上手くいくように。[私の娘]、あなたの義理の娘であるタドゥヘパのため、全てが上手くいくように。あなたの国々のため

に、[あなたの軍隊のた] めに、あなたに属する他の全てのものがより [良く] ありますように。]

EA28: 1-11; edition by Moran 2000, 90.

「[私を愛] し私が愛するエジプ [ト] 王、我が兄弟、私の義理の息子であるナプフレレヤへ言いなさい。このように、あなたを愛し、あなたの兄弟を愛するミタン [ニ] の王、あなたの義父であるトウシュラッタ。私のために全てが上手くいく。あなたのために全てが上手くいくように。あなたの家族のため、あなたの母、エジプトの女王であるティイのため、私の娘、あなたの妻であるタドゥヘパのため、あなたの残りの妻たちのため、あなたの息子たちのため、あなたの有力者達のため、あなたのチャリオットのため、あなたの馬のため、あなたの軍隊のため、あなたの国のため、あなたに属する他の全てのものがより良くありますように。」

EA26の内容は、トウシュラッタがアメンヘテプ3世に金の像を贈ってもらおうと約束したのに対し、アメンヘテプ4世から金メッキの像が贈られてきたため金の像の要求をしていることが書かれている。ティイへ書簡を送った理由は、トウシュラッタがティイに伝えれば、息子であるアメンヘテプ4世に金の像をミタンニへ送るように口添えしてくれると考えたためであろう。ティイはトウシュラッタにとって、アメンヘテプ4世よりもミタンニとエジプトとの外交を進める上で交渉しやすい人物であったことが読み取れる。

ティイからトウシュラッタへの返信の手紙は発見されていないが、トウシュラッタからアメンヘテプ4世に送られたEA27で、金の像の要求を続けていることが記されている。そして、トウシュラッタは毎回ティイを思いやる挨拶を書いている。また、トウシュラッタがアメンヘテプ4世へ送ったEA28とEA29においても、トウシュラッタがティイを通して外交を成功させようとしていることがわかる。

EA28: 42-49; edition by Moran 2000, 91.

「ティイ、あなたの母は、私があなたの父と話した全ての言葉を知っている。それらを他の誰も知らない。あなたはあなたの母であるティイにそれらについて尋ねなければならない、そうすれば彼女はあなたに話せる。ちょうどあなたの父がいつでも私へ愛を示したように、今度は私の兄弟がいつでも私へ愛を示してくれますように。そして私の兄弟が誰からも何も聞かないように。」

EA29: 9-10; edition by Moran 2000, 92.

「あなたの父であるニムレヤの主な〔そしてお気に入りの〕妻であるティイは、ニムレヤが私〔へ〕何度も書こうとした全ての言葉を知っている。あなたがそれら全てについて尋ねなければならないのは、あなたの母であるティイだ。：あなたの父が〔何度も書こうとしたこと〕、彼が何度も私と話そうとしたこと。」

ゼカラキヤダ・シルヴァが指摘しているように、スフィンクスの姿で外国の捕虜を殴る図像や、ティイの名が刻まれたアメンヘテプ3世の記念スカラベなどの資料から、ティイがエジプト内外において強大な権力を保持していた王女であると捉えられていた。それに加えて、アマルナ文書の文面からミタンニのトゥシュラッタはアメンヘテプ4世との交渉の橋渡しの役目をティイに求めていたことが想定できる。また、冒頭の挨拶の形式もファラオへの手紙の形式と類似しているように、外交においても直接的に参与していた王家の女性であったことがわかる。

(2) ネフェルトイティ

ネフェルトイティはアメンヘテプ4世の妻である。彼女は、「偉大なる王の妻」、「二国の貴婦人」の称号を持っていた。彼女もティイのように、図像学的資料や考古資料から国内外において権力を持っていたと考えられている。例えば、ボストン美術館に所蔵されているネフェルトイティの船を飾っ

ている場面が描かれたレリーフには、王妃自身が前面に出て、右手に持った剣を巧みに使いこなし、敵の女性を殺そうとする図像が描かれている（ボストン美術館所蔵：Accession Number: 63.260）³¹。また、ダ・シルヴァが取り上げたようにネフェルトイティの高官メリラ2世の墓にはアメンヘテプ4世の統治12年を祝うネフェルトイティとアクエンアテンのレリーフが描かれている。この図像では、異国の人を前に彼らは座っている。そして、先述したように、考古資料ではウルブルンの沈没船の中でネフェルトイティの名が刻まれた金のスカラベが発見されている。これらの資料から彼女が外国に対してティイのように権威を持っていたことはわかるが、外交書簡が残されていないため、実際の外交においてどのような役目を果たしたかは具体的に考察できない。

（3）アंकエスエンアムン

アंकエスエンアムンは、夫トゥトアंकアムンの妻である。「王の体より出でし娘」、「偉大なる王の妻」、「二国の貴婦人」という称号を持っている。彼女は、トゥトアंकアムンが亡くなった後にヒッタイトのシュッピルリウマ1世に書簡を送っている³²。書簡には、アंकエスエンアムンがエジプト王としてヒッタイトの王の息子を求めたことが記されている。しかし、ヒッタイト王の息子ザナンザはエジプトへ向かう途中で殺されてしまった。実際には、この事実を記した記録がエジプトで発見されていないため、この書簡をアंकエスエンアムンが書いたかどうかは分からない。

2、バビロニア

バビロニアの姫は、EA12においてエジプト王へ手紙を送っている。シュルマンは、バビロニア王ブルナブリアシュからアメンヘテプ4世へ送られたEA11の内容がEA12に関連すると述べる。更に、EA12における「ブルナブリアシュの神」という文言が記載され、そしてバビロニアの姫が「私の主人」とエジプト王を呼んでいることから、彼女はすでにエジプト王の妻になるために油を頭上に乗せられておりエジプトへまだ来ていない状態と指

摘する³³。このように、エジプトへ嫁ぐことが決まっていたバビロニアの王家の女性も自ら書簡をエジプト王へ送っていたことが想定できる。目的としては、バビロニアとエジプトの友好関係を保つためだったと考えられる。

3、ウガリット

ウガリットの女王は、EA48でエジプト女王へ向けた手紙を書いている。おそらくニクマッド2世の時代の手紙と考えられる。文書には、バルサムの芳香の壺をエジプト女王へ送ることが記されており、エジプト王と西アジアの王が友好関係を保つために贈り物を送り合っていたように、ウガリットの女王もエジプト女王との外交関係を保つために贈り物を送ったことが考えられる。

第2節 紀元前13世紀において書簡を通じて外交を進める王家の女性

1、ヒッタイト

紀元前13世紀では、ヒッタイトの首都ハットゥシャで発見された文書22Eにおいてヒッタイトのハットゥシリ3世の妻プドゥヘパがラメセス2世へ手紙を書いている。22Eの内容は、ヒッタイトの花嫁の派遣が遅れていることに対してラメセス2世が怒っていることへ返答である。初めの挨拶の部分は欠けているが、プドゥヘパは、王家の倉庫の火事により資源が無くなったことや冬が始まったことを理由にヒッタイトの立場を弁明している。彼女は文書内で「今、私はエジプトとヒッタイトが1つの国になることを知っている。」(22E: § 13; edition by Beckman 1995, 129)という言葉を挙げており、エジプトとヒッタイトの王室間結婚を経て両王家は1つになることを示唆している。

ラメセス2世がプドゥヘパへ書いた手紙は22Fである。22Eにおいてプドゥヘパはラメセス2世のことを「我が兄弟」と呼び、22Fにおいてラメセス2世はプドゥヘパのことを「我が姉妹」と呼んでいることが特徴的である。山本氏は、この点についてヒッタイト王が他国の王と対等な関係であ

ると捉え、かつ対等と認められる場合に「我が兄弟」と呼び合い、その呼び名を用いることは情勢に左右されたと指摘する³⁴。そして、紀元前14世紀においてもアマルナ文書を通してエジプト王と列強国の王がお互いを「我が兄弟」と呼び合っていたように、当時の外交関係を築く慣習が紀元前13世紀におけるエジプトとヒッタイト間における外交文書でも受け継がれていたことがわかる。

そして、プドゥヘパはラメセス2世へ嫁がせる自分の娘について文書内で言及していたことから、政略結婚を通して外交に役目を果たす王家の女性とは異なった立場で外交に参加していることがわかる。むしろ、王のように外交を進める側として活躍していたことが考えられるだろう。最終的にラメセス2世は、プドゥヘパの娘が自分のハーレムに送られると決まったことを喜んでいることが次のように記載されている。つまり、プドゥヘパがラメセス2世との婚姻政策を成功させたことを示している。

22F: § 7; edition by Beckman 1995, 130.

「私たちが私自身に永遠に見つけるこの良い関係でさえ、太陽神と嵐の神が私たちに兄弟愛と平和を与えるだろう。そして私たちの使者が持続的に永遠に私達の間を行き交い、兄弟愛と平和を育てていこう。」

22F: § 9; edition by Beckman 1995, 130.

「太陽神と嵐の神は、我が姉妹があなたの娘のために望んだ全ての手配を完成するのを見るだろう。」

山本氏は、プドゥヘパがラメセス2世への書簡(CTH176)の中で、ファラオと自分の娘の結婚について述べる際にラメセス2世に対して「姻族」という言葉を使用していると指摘する³⁵。同氏は、この文書は、当時の国際語のアカド語ではなくヒッタイト語で書かれていることから書簡の草稿と考えられ、実際にラメセス2世を「姻族」と呼んだかどうかはわからないが、山本氏はヒッタイト王が王女と結婚した他国の王を「我が息子」ではなく「姻族」と呼ぶことで、ヒッタイト王を他国の君主とみなす政策であった

と指摘する³⁶。そして、ヒッタイトは条約と結婚に基づく外交政策を実施していた³⁷。

これらのことから、プドゥヘパは直接的にラメセス2世と交渉し、外交を成功させていたことが想定された。そして、ラメセス2世と対等に近い関係で外交関係を築いたことに加えて、ヒッタイト独自の婚姻政策を政略結婚に反映させていたことがわかった。プドゥヘパは、ラメセス2世と「我が兄弟」、「我が姉妹」と呼び合うことでお互いに友好関係を築いていたように思われる。しかしながら、彼女の真意は友好関係を築くよりも、エジプトを属国化しようという考えが存在していたことが想定される。ヒッタイトは自国のみならず、諸外国も支配下に置くことで西アジア及びエジプトの支配を目的にしていたのかもしれない。

2、エジプト

ラメセス2世の妻ネフェルトアリは、22Bにおいてヒッタイトのプドゥヘパへ手紙を書いている。プドゥヘパがティイへ手紙を書いたことがきっかけである。ネフェルトアリは、「神妻」、「王の妻」、「上下エジプトの女主人」、「二国の貴婦人」という称号を持っている。プドゥヘパは、ラメセス2世だけでなくネフェルトアリからも「我が姉妹」と呼ばれている。また、友好関係を保つためにプドゥヘパへ贈り物が送られることが書かれている。更には、「太陽の神と嵐の神があなたをたたえ、太陽の神は繁栄のために平和をもたらし、永遠に良い兄弟関係を偉大なる王であるエジプト王、彼の兄弟であり、偉大なる王であるヒッタイトの王の間にもたらすでしょう。そして、私は同じように平和な状態にあり、私の姉妹であるあなたと姉妹関係にある。」(22B: § 4; edition by Beckman 1995, 123) という文言が記されている。太陽の神はエジプト、嵐の神はヒッタイトを象徴していることが想定できる。お互いの国の神を認め合っていたことも踏まえると、当時のヒッタイトとエジプトの外交関係がお互いに上手く保たれていたことが考えられる。

第3節 政略結婚を通じて外交に参与する王家の女性とその影響

1、ミタンニ

(1) ギルヘパ

紀元前14世紀において、ミタンニのトゥシュラッタの妹ギルヘパがアメンヘテプ3世の妻になっている。ギルヘパはアメンヘテプ3世の記念スカラベにその名が刻まれており、第二の王の妻、つまりティイの次の妻として記されている。そして、アメンヘテプ3世のギルヘパスカラベには「シュツタルナの娘、ナハリンの王、ギルヘパ、317人の女性がいるハーレムの女主人」と書かれており、ギルヘパがハーレムのまとめ役であったことが想定される³⁸。

ミタンニのトゥシュラッタからアメンヘテプ3世に送られたEA17では、友好関係を保つためにトゥシュラッタの父シュツタルナ2世がギルヘパをアメンヘテプ3世に捧げたことが記されている。また、トゥシュラッタからアメンヘテプ3世に送られたEA19には冒頭の挨拶の中にギルヘパがうまくいくことを願っていることが書かれている。また、ギルヘパの持参金リストは発見されていないが、実際に彼女への持参金が存在したことはEA24に記されている(EA24: § 22:36)。このように、ギルヘパはティイに次ぐ第二の王の妻であり、ハーレムの女主人であったこと、そしてEA19やEA24においてトゥシュラッタが彼女について取り上げたように、当時のミタンニとエジプトの外交関係を結ぶ役目の一端を担っていたことが考えられる。

(2) タドウヘパ

紀元前14世紀におけるミタンニのトゥシュラッタの娘タドウヘパはアメンヘテプ4世の妻として送られている。以下に取り上げるアマルナ文書は、ミタンニのトゥシュラッタからアメンヘテプ3世へ送られている。EA19とEA20には、シャウシュカとアムン神がタドウヘパをエジプト王が望むイメージにしてくれますようにと書かれている(EA19:24, EA20:27)。同じように、EA21には太陽の神であるシミギとシャウシュカがタドウヘパをエ

ジプト王が望む娘にしてくれますようにと記載されている (EA21:14-15)。EA22は持参金³⁹リストであり、装飾品、日用品、武具などが記されている。EA23には、おそらくトゥシュラッタの娘の結婚と関連した儀式のために、シャウシュカの神像が送られることが記されている。EA25もトゥシュラッタからの結婚の持参金 *mulugu*⁴⁰ リストであり、装飾品、日用品などが記されている。EA22、25のような持参金リストには異国の美術様式が取り入れられた工芸品も含まれており、文化交流の証左となったと考えられる⁴¹。また、EA19、20、23のようにミタンニの神シャウシュカを受け入れるきっかけともなった。

2、エジプト

紀元前14世紀におけるメリトアテンは、アメンヘテプ4世とネフェルトイティの娘であり、アंकエスアムンの姉であった。「王の体より出でし娘」、「偉大なる王の妻」という称号を持っていた。メリトアテンは、バビロニアのブルナブリアシュ2世からアメンヘテプ4世に送られたEA10に登場する。ここでは、メリトアテンヘラピスラズリのコオロギ (*timb [u] eti*)⁴²の形をしたネックレスを贈り物として贈ることが書かれている。また、バビロニアのブルナブリアシュ2世からアメンヘテプ4世に送られたEA11には、コオロギの形をしたラピスラズリ20個を家の女主人（おそらくメリトアテン）に送ったと書かれている。そして、ブルナブリアシュ2世は文書において、私が健康になるまでメリトアテンが私のことを気にならなかったと述べており、メリトアテンに関心を向けてほしかったことがわかる (EA11:26)。一方、ティルススの王アビミルクからエジプト王へ送られたEA155では、「マヤティ（メリトアテン）の下部」と自国を表現しており、その文言が4回登場する。また、「私の女王」という言葉を2回記している⁴³。更に、ティルススを「マヤティ（メリトアテン）の都市」であると3回表現している。これらのことから、メリトアテンは列強国であったバビロニアの王から関心を寄せることを求められていたこと、都市国家であったティルススがEA155においてメリトアテンに従属する表現を多用していたことか

ら、エジプトと友好関係を保つ上で影響力のある王家の女性であったことがわかる。

3、バビロニア

バビロニアでは、クリガルズ2世の娘がアメンヘテプ3世の妻として送られた。このことは、アメンヘテプ3世からカダシュマンエンリル1世へ送られたEA1に記されている。しかしながら、誰も彼女が生きているかどうか分からないということが書かれている(EA1:13-14)。カダシュマンエンリル1世の娘もアメンヘテプ3世へ送られた。また、ブルナブリアシュ2世の娘は、おそらくアメンヘテプ3世の妻として送られた。ブルナブリアシュ2世からアメンヘテプ4世へ送られたEA11では、娘の頭に油が塗られたことが書かれている。EA13は持参金リストであり、宝石や家具、日用品が記載されている。

紀元前13世紀には、おそらくバビロニアの王家の娘(カダシュマンエンリル2世の血縁関係)がラムセス2世の妻として送られた。そして、22Eにはバビロニアの使者達がエジプトへ送られたバビロニアの王家の娘を訪ねたが、使者達は外で立たされたままであったことが記載されている。

4、アルザワ

紀元前14世紀において、アルザワのタルフンダラドゥの娘はおそらくアメンヘテプ3世の妻として送られたと考えられる。登場する文書はEA32で、ヒッタイト語で書かれている。タルフンダラドゥからファラオへの手紙には、自分の娘を送ると書かれていた。

5、ヒッタイト

紀元前13世紀において、マアトホルネフェルウラーはヒッタイトのハットゥシリ3世とプドゥヘパの長女であった。ラムセス2世の妻となり、「偉大なる王の妻」という称号を持った。両者の結婚については、アブシンベル大神殿正面のテラスの南側面に刻まれている⁴⁴。プドゥヘパとラムセス2世

の外交関係の均衡が書簡を通して保たれていたことから、マアトホルネフェルウラーの結婚がミタンニとエジプトの関係を更に強くしたと考えられる。

6、アッシリア

紀元前 13 世紀において、おそらくアッシリアの王女がラメセス 2 世へ嫁いだことが 22E に記載されている。

7、ズラピ

紀元前 13 世紀において、おそらく北シリアのズラピの王女もエジプトへ嫁いだことが 22E に記載されている。

第4章 考察

以上のように、書簡を通して外交に役割を果たした主な王家の女性は、紀元前 14 世紀におけるエジプトのティイ、紀元前 13 世紀におけるヒッタイトのプドゥヘパとエジプトのネフェルトアリが挙げられるだろう。特にティイとプドゥヘパは、他国の王にとって交渉の相手であったことが共通している。そして、どちらかというプドゥヘパは、ティイと比較して外交に果たした役割は大きい。なぜなら、ラメセス 2 世と交互に書簡を交わし、ヒッタイト独自の婚姻政策を生かして自分の娘をエジプトの王家へと嫁がせることに成功したからである。また、アマルナ文書で列強国の王がエジプト王から「我が姉妹」と呼ばれていたように、初めてヒッタイトの王家の女性としてプドゥヘパがラメセス 2 世とネフェルトアリから「我が姉妹」と呼ばれている。最終的に、エジプトへ嫁いだマアトホルネフェルウラーは、「偉大なる王の妻」という称号を与えられ、アブシンベル大神殿正面のテラスの南側面の壁にラメセス 2 世との結婚について刻まれた。これらのことから、プドゥヘパはエジプトとヒッタイトの王室関係を強固に結ぶ役割を担い、自分の娘であるマアトホルネフェルウラーへその役目の一端を受け継いだことが考えられる。そして、ネフェルトアリはプドゥヘパとの友好関係を保つために書簡を送ったと考えられる。

また、ウガリットの女王やバビロニアの姫も直接的に外交に貢献したと考えられる。ウガリットの女王は、EA48 でエジプト女王へ向けた手紙を書き、贈り物をエジプト女王へ送ることを記し、友好関係を築こうとしたからである。また、EA12 におけるバビロニアの姫については、彼女は自ら文書を書いてエジプトへ送っており、シュルマンが指摘したように、彼女がエジプトへ嫁ぐことが決まっていた王家の女性であった可能性もあるが、書簡を送った目的の1つとしてはエジプト王との関係を保つことにあったと考えられるためである。

外交においてどのような役目を果たしたかわからない王家の女性は、ネフェルトイティ、アंकエスエンアムンであった。図像学的資料や考古学的資料から、ネフェルトイティがティイのように外国に対し権威的であったことは事実だと思われるが、外交に対して具体的にどのような役目を果たしたかは外交文書が残されていないことから不明確である。アंकエスエンアムンは、ヒッタイトへ書簡を送っている記述があるものの、エジプト側でその記述が発見されていないため、本当に彼女が書いた書簡なのかわからない。そのため、王家の女性として直接的に外交の役割を果たしたと想定することはできない。

一方、政略結婚を通じて外交に参与した王家の女性は、紀元前14世紀ではミタンニやバビロニア、アルザワの王家の女性、紀元前13世紀ではバビロニアやアッシリア、ヒッタイト、ズラピの王家の女性が挙げられると想定できる。

例えばミタンニのギルヘパは、アメンヘテプ3世の第二の王の妻であったことや、ハーレムにいる317人の女性の代表であったことから、ミタンニとエジプトの友好関係を結びつける一端を担っていたと推定できる。また、タドゥヘパの結婚を通してミタンニの神シャウシュカがエジプトへ伝わった可能性があることや、持参金に含まれていた工芸品を通して文化交流に繋がったと考えられる。

また、ヒッタイトのマートホルネフェルウラーは、「偉大なる王の妻」という称号を与えられ、アブシンベル大神殿正面のテラスの南側面の壁にラメ

セス2世との結婚について刻まれていることから、ヒッタイトとエジプトの結びつきを強固にさせた。

一方、不遇な扱いを受けていた可能性がある王家の女性もいた。アメンヘテプ3世からカダシュマンエンリル1世へ送られたEA1には、アメンヘテプ3世の妻として送られたクリガルズ2世の娘について、誰も彼女が生きているかどうか分からないということが記載されていた。エジプトへ嫁いだ王家の女性への待遇はそれぞれ異なっていた可能性があったかもしれない。

以上のように、紀元前14世紀と紀元前13世紀における古代オリエントの王家の女性の役割は、エジプトと西アジア側は異なると棲み分けできないことがわかった。ティイやネフェルトイティは強大な権力を外国に対して保持していたことはわかるが、ネフェルトイティについては外交書簡が残されていないため実際どのような役目を果たしたかはわからない。また、ヒッタイトのプドゥヘパが書簡を通じて直接的にエジプトと外交関係を保ち、ラメセス2世と娘の婚姻を実現させたことから、西アジアの王家の女性たちが政略結婚を通じて外交の役割を果たしていたと枠付けするのは困難であろう。

そして、藤井氏や山本氏が指摘していたように、プドゥヘパの婚姻政策にはヒッタイト独自の婚姻政策が反映されていた。しかしながら、シュルマンが述べるように、エジプトの情勢に応じてエジプトの王家の女性を他国へ嫁がせるか否かを決めていたという説も全て否定的に捉えることはできないと考えられる。なぜなら、紀元前14世紀と紀元前13世紀ともにエジプトが他国へ王女を嫁がせたという記録が発見されていないからである。

おわりに

紀元前14・13世紀における古代オリエント世界において、当時の王家の女性が外交に果たした役割は、エジプトの王家の女性が強大な権力を持ち外交に携わっていた、そして西アジアの王家の女性が政略結婚を通じて外交に参与していたという枠で棲み分けることは困難であることがわかった。それは、紀元前14世紀にはエジプトのティイが、紀元前13世紀にはミタンニのプドゥヘパが他国の王と書簡を通じて外交に参与していたからである。更

にプドゥヘパは、ラメセス2世との外交を通じて自国の婚姻政策を元に婚姻同盟を実現させた。ネフェルトイティは図像学的資料や考古資料からその権力の強大さは想定できるが、外交書簡に彼女が関連した記録が発見されていない。また、都市国家であったウガリットの女王やバビロニアの姫が直接的に外交書簡を通じてエジプトと友好関係を築こうとした可能性があることを視野に入ると、想像以上に各々の国の王家の女性が積極的に外交に関与していたことも考えられる。

また、政略結婚については、プドゥヘパのようにヒッタイト独自の婚姻政策をエジプトとの婚姻同盟に反映させていたことがわかった。しかしながら、シュルマンが指摘するように国勢の優劣によって政略結婚を実施していたという説も否定することは難しいと考えられる。従って、古代オリエントにおける王家の女性の外交への参与を考慮する際は、1つの要因に限定せずに、当時の情勢、各国独自の婚姻政策や王家の女性の技量などの複数の要因から考察することが大切だと考えられる。

略称

[CAD] *The Assyrian dictionary of the Oriental Institute of the University of Chicago*. Chicago and Glückstadt.

[CTH] Laroche, E. *Catalogue des textes hittites*. Paris, 1971.

[EA] El Amarna (アマルナ文書の番号に付く略称)

[KUB] *Keilschrifturkunden aus Boghazköy*. Berlin, 1921-1944.

史料

Beckman, G. *Hittite Diplomatic Texts*. Atlanta and Georgia: Scholars press, 1995.

Budge, E. *The Tell El-Amarna Tablets in the British Museum with Autotype Facimiles*. London: Nabu Press, 2010.

Knudtzon, J. A. *Die El-Amarna-Tafeln: mit Einleitung und Erläuterungen*. Leipzig: J.C. Hinrichs, 1915.

Mercer, S. A. B. *The Tell-El-Amarna Tablets*, vol. 1, 2. Toronto: Macmillan Co. of Canada Ltd, 1939.

Moran, W. L. *The Amarna Letters*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2000.

Izre'el, S. "The Amarna Tablets."

<http://www.tau.ac.il/humanities/semitic/amarna.html> (accessed March 29, 2020).

- (1) G. Xekalaki, "Egyptian Royal Women and Diplomatic Activity during the New Kingdom," in *Current Research in Egyptology 2005: Proceeding of the Sixth Annual Symposium*, ed. R. Mairs and A. Stevenson (Oxford: Oxbow Books, 2007), 163-174.
- (2) *Ibid.*, 167.
- (3) 内田杉彦氏は、この称号が、王子が王位を継承した後に母に捧げられ、ヘムト・ネスウよりも早くから用いられていることから、夫の後継者を生むことが王の配偶者の重要な役割であったと指摘する。内田杉彦「古代エジプトの王妃と女王」『明倫歯誌』第11号、2008年、46頁。
- (4) G. Xekalaki, *op. cit.*, 169.
- (5) *Ibid.*, 169.
- (6) L. O. G. da Silva, "The Price of Gold and Loyalty: Parallels and Disparities in the Roles of Royal Women of the Late Bronze Age," in *Semna-Estudios de Egiptologia III*, ed. A. Brancaglion Junior and C. A. Gama-Rolland (Rio de Janeiro: Seshat, 2016), 69-86.
- (7) *Ibid.*, 70.
- (8) L. Green, "Queens and Princesses of the Amarna Period: The

Social, Political, Religious and Cultic Role of the Women of the Royal Family at the End of the Eighteenth Dynasty,” *Ph. D. Dissertation* (University of Toronto, 1988): 224.

- (9) 紀元前 14 世紀中葉に年代づけられるアマルナ文書は、1887 年にエジプトの都市テル・エル＝アマルナの公文書保管庫「ファラオの書簡所」から発見された文書である。総数 382 枚の文書は、350 枚の外交書簡と贈答リスト、残り 32 枚の書記学校で用いられたと考えられているスカラリータブレットに分けられる。主にエジプトと列強国(バビロニア、ヒッタイト、ミタンニ、アッシリア、アラシヤ、アルザワ) との外交書簡、そしてエジプトとレバントの都市国家との書簡に区分される。また、11 枚のアマルナ文書はエジプトで記され、339 枚の文書は西アジアの国々からエジプトへ送られた。文書の書き手は、王の書記であった。アッカド語を母国語としない国々の書記が書いた文書には、しばしば彼らの母国語の影響が文体にみられる。2 通のヒッタイト語と 1 通のフリ語で記された文書以外は、全てアッカド語で記されている。
- (10) Green, *op. cit.*, 225.
- (11) N. D. G. Davies, *The Rock Tombs of El Amarna: The Tombs of Panehesy and Merya II* (London: Gilbert and Rivington Limited, 1905), plate. XXXVII.
- (12) トルコ南部のカスから南東に位置する海中で沈没した紀元前 14 世紀のウルブルンには、金のスカラベ以外にも、銅のインゴットや鉛などの鉱物、ガラスのインゴット、アンフォラ、剣など様々な積み荷が発見されている。
- (13) da Silva, *op. cit.*, 74.
- (14) *Ibid.*, 76-80.
- (15) *Ibid.*, 78.
- (16) *Ibid.*, 78.
- (17) A. R. Schulman, “Diplomatic Marriage in the Egyptian New Kingdom,” *Journal of Near Eastern Studies* 38 (1979): 191.
- (18) M. Liverani, “The Great Powers’ Club,” in *Amarna Diplomacy: The Beginnings of International Relations*, ed. R. Cohen and R. Westbrook (Baltimore and London: The Johns Hopkins University, 2000), 26.

- (19) S. A. Meier, “Diplomacy and International Marriages,” in *Amarna Diplomacy: The Beginnings of International Relations*, ed. R. Cohen and R. Westbrook (Baltimore and London: The John Hopkins University, 2000), 170-172.
- (20) 藤井信之「ソロモンへ嫁した「ファラオの娘」をめぐる問題について—前1千年紀エジプトの衰退史観再考の視点から—」『神戸国際大学紀要』第83号、2012年、25～34頁。
- (21) 同上、32頁。
- (22) 同上、32頁。
- (23) 同上、32～33頁。
- (24) 同上、32頁。
- (25) 山本孟「帝国時代におけるヒッタイトの支配体制：副王制・属国支配・外交」『史林』第96巻第4号、2013年、517頁。
- (26) 同上、517頁。
- (27) 山本氏は、ヒッタイトは、条約（縦の関係）と結婚（横の関係）による外交政策をとると述べている。例えば、「条約 (*išhiya-*)」は上下関係を前提に発行される条約を意味し、「結ぶ (*hamenk-*)」は上下関係ではなく双方の家族の合意によって成立を意味するという。同氏によると、条約を課された者はその束縛から自らの意志で逃れることはできないとし、結婚は、どちらか一方から課される束縛ではなかった可能性があることを指摘している。山本孟「ヒッタイトの「条約」と「婚約」の概念—動詞 *išhiya-*「縛る」と *hamenk-*「結ぶ」に関する一考察—」『オリエント』第57巻第2号、2015年、13～14頁。
- (28) 内田杉彦「古代エジプトの王妃と女王」『明倫歯誌』第11号、2008年、49頁。
- (29) スフィンクスの姿で表現されることは、通常は王に用いられる。ティイはエジプトの敵を踏みじめる様子で初めて女性のスフィンクスの姿で描かれた女王である。この姿で描かれた図像学的資料の例として、テーベのケルエフ墓 (T T 192 号室) には、夫の後ろで玉座に座ったティイが描かれている。王より小さく描かれた王妃は、ウラエウス、モディウス、丈の高い羽飾りを頭に載せ、アंकを持つ。玉座の側面において、王妃はスフィンクスの姿で描かれ、縛られた女性捕虜二人を踏みつけにしている。(Epigraphic Survey, *The tomb of Kheruef: Theban Tomb*

192 (Chicago: Oriental Institute of the University of Chicago, 1980), pl. 49.)。スフィンクスの姿をしたティイの図像は、ニューヨークのメトロポリタン美術館に所蔵されている紅玉髓の腕輪の飾り板にも表されている。テーベで発見され、新王国時代第 18 王朝に年代付けられている。こちらのスフィンクスの頭飾りはヌビアや西アジアなどの外国との関係を示している可能性がある。そして、夫であるアメンヘテプ 3 世のカルトウーシュを持っている。(メトロポリタン美術館所蔵: Accession Number: 26.7.1342)。

- (30) 翻訳の表記に関して、[] は復元された文章の箇所を示す。
- (31) この図像が描かれたレリーフは、新王国時代第 18 王朝に年代付けられる。エル＝アマルナで発見された。ネフェルトイティが敵を殺そうとする姿で描かれた図像については、次の資料を参照。S, Tawfik. “Aton studies 3: back again to Nefer-nefru-Aton,” *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 31(1975): 165, fig. 1.
- (32) H, Guterbock, “The Deeds of Suppiluliuma as told by his son, Mursili II,” *Journal of Cuneiform Studies* 10 (1956): 41-68; 75-98; 101-130. DS, p. 94, frag. 28, A, iii 11-15, pp. 96-97, frag. 28, A iii 50-A iv 12.

アネクエスエンアムンは、自分の夫が亡くなったためヒッタイトの王子を求めることを書簡に記していたが、シュッピルリウマ 1 世は彼女の要請を信じようとしなかった。それに対し、彼女は改めてヒッタイトの王子をエジプトへ送るように要請した。これを受け、シュッピルリウマ 1 世は息子ザナンザをエジプトへ送ったが、道中でおそらくザナンザはエジプト人に殺され、息子をエジプト王にする計画は実現しなかったと考えられている。

山本孟「帝国時代におけるヒッタイトの支配体制：副王制・属国支配・外交」『史林』第 96 巻第 4 号、2013 年、29-30 頁。

- (33) Schulman, *op. cit.*, 185.
- (34) 山本孟「ヒッタイト王家の家族観とその外交への適用」『西南アジア研究』第 82 号、2015 年、7～8 頁。
- (35) 山本氏は、「あなた、姻族は [私の娘を (結婚において) 取るだろう。] (KUB 21.38 ii 17; edition by Hoffner 2009:289) という記述からプ

- ドゥヘパがラメセス2世を姻族と捉えようとした可能性がある」と指摘する。同上、14頁。H. A. Hoffner, *Letters from the Hittite Kingdom*, Vol. 15. (Atlanta: Society of Biblical Literature, 2009).
- (36) 山本氏によるとブドゥヘパが対等関係を示す「我が兄弟」ではなく、主従関係を表す「姻族」とラメセス2世をみなそうとしていたことは想定できると述べる。ヒッタイトは、王女と諸外国の王を結婚させ、彼らを姻族にすることによって、ヒッタイト王を君主と認めさせる政策を実施していたようである。同氏は、姻族が、王の実の息子や養子、兄弟より地位は低い、王とは別の家政を営む王族の中では最も高い地位であったことから、ヒッタイト王にとって諸外国の王を位置づけるのに適切な身分であったと指摘する。更に、山本氏は、諸外国の王にヒッタイト王家の一員としてのアイデンティティを共有させ、彼らをヒッタイトの文化的価値観のもとに置き、諸外国の王が王位継承の候補者になれないための外交政策であったと言及している。同上、14～15頁。
- (37) 山本孟「ヒッタイトの「条約」と「婚約」の概念—動詞 *išhiya*-「縛る」と *hamenk*-「結ぶ」に関する一考察—『オリエント』第57巻第2号、2015年、1～16頁。
- (38) J. H. Breasted, *Ancient Records of Egypt: Historical Documents from the Earliest Times to the Persian Conquest*, vol.2. (Chicago, University of Chicago Press, 1906), 347-348.
- (39) 「持参金」は、*terhatu* という単語にあたるがEA22ではこの用語が記載されていない。CAD, t, 342 参照。
- (40) 花嫁の父からの資産、つまり持参金を意味する。CAD, m2, 193 参照。
- (41) 例えば、EA25には、円筒形のラピスラズリ13個に、金のキャップが両側に付けられ、円筒形の *hulalu* 石が使われた *maninnu* ネックレス1つ (EA25:I:39) が贈り物として記載されている。このネックレスに類似した考古学的資料として、ニネヴェで発見されたネックレスがある。それは、金のキャップが付いたヘマタイトの印章が数珠状に繋がれている形状となっている。このことから、ミタンニのネックレスのデザインの様式がエジプトへ伝わったことに加え、アッシリアにもこのデザインが使用されていたことが考えられる。齊藤麻里江「紀元前14世紀における古代エジプトと西アジアを中心とした古代東地中海世界の文化交流—アマルナ文書に記された工芸品と考古学的資料を中心に」『駒澤史学』

第 90 号、2018 年、510 頁。

- (42) *timbuttu* は、装飾品のピースの一部を意味する。コオロギを語源とする名詞とされている。CAD, T, 417 参照。
- (43) N, Na'aman. “The origin and historical background of several Amarna letters,” *Ugarit Forschungen* 11 (1979): 675 参照。
- (44) J. H. Breasted, *Ancient Records of Egypt: Historical Documents from the Earliest Times to the Persian Conquest*, vol.3. (Chicago, University of Chicago Press, 1906), 182.